福岡
地域福祉活動職員の
まなこ
地域福祉活動推進のために
No.64　２００９年１２月発行　福岡県地域福祉活動職員連絡会

★報告
≪地域福祉の考え方を再構築する研修会≫
ソーシャルクオリティを使った地域分析へ

▲１月に予定している、うきは市での調査に向けて、ソーシャルクオリティを活用した地域分析や、コミュニティワークの展開について、研修しました。

コミュニティワークには新たな可能性がある。事後的対応から予防的対応へソーシャルクオリティを活用した地域分析

本年度の地職連研修事業は、生活世界からの地域福祉論を切り口に、私たちが関わる『地域福祉』をシリーズで考え、再構築する研修として、８月にスタートしています。全７回で、講師に小野達也先生（大阪府立大学准教授）を迎え学習しています。第５回目が１１月１３日（金）、春日市総合福祉センターにおいて開催されました。
（報告／うきは市社会福祉協議会　栗原真希　）

個人支援　予防的対応も視野に入れたコミュニティワークの展開

まず初めに、改めてこの研修で目指すものを確認しました。

これまでの研修でも、それぞれの社協で行っているニーズ調査について意見交換をしています。ワーカーの現状として、組織に属するために行いたいことが制約されたり、時間がない為にコミュニティワークができない、調査に基づく実践になっていない、事業計画に沿った実践はできても、調査に基づく実践ができていない、といった意見がでてきたように、戸惑いや迷いを抱えているワーカーは少なくありません。

個人支援に終わってしまい地域支援に広げられていないという意見もありました。個人支援も大切で、実際やり始めるとやりがいのある仕事です。しかし、それだけで終わってしまう可能性が高く、本当にそれで良いのかという問いが生まれてきます。

また、近い将来、今話題の事業仕分けのように、社協がなぜ必要なのか、仕事の意味は何なのかと問われるようになることが予想されます。その時に、社協とはなにかと説明責任（アカウンタビリティ）が求められる可能性もありま

す。社協活動の価値、「何が大切か」ということを意識しながら、私たちは仕事ができているでしょうか。

生活世界からの地域福祉システムを変える

そのヒントは、生活世界にあるのではないでしょうか。生活世界の中でシステムは大きくなっていますが、それではいずれ生活世界は植民地化されてしまいます。

そこで、生活世界からシステムをつくり変えていけるのではないか、と考えることはできないでしょうか。そうすれば社会が変わるのだとすれば、その時こそ、社協の出番です。地域の一定の人（有力者など）だけが発言するのではなく多くの人が生活世界を変えるための意見を述べられるような場を社協が提供し、最終的には、その声を集めて新たな公共を作っていくという過程を社協が支援していければよいのです。

では、どのように働きかけていけば良いのでしょうか。その3つの視点が紹介されました。

①地域をどのように捉えていくのか

これまで、地域を各々の経験の中で捉えていたが、この研修を通して共有できる捉え方の確立ができればよい。

②コミュニティーワークは、地域支援で終わらない

個人支援で、ネットワークをつくり地域で取り込み、地域全体で支援ができるように社協は考えていくべきである。また、個人支援を目にいれた地域支援ができればよい。（地域支援→個人支援）

③事後的対応から予防的対応へ

これまでは、何か起きたところから支援していますが、その課題が起きた原因を考えるという予防的発想がどれだけできるのかということが大事。

この研修では、これらの3つの発想を持って、「調査→分析→課題の抽出→対応策の検討→実践→フィードバック」といった一連のコミュニティワークを試みてみることにしています。

客観的な視点で地域調査 ソーシャルクオリティを使った地域分析へ

前回の研修で、ソーシャルクオリティ（以下、SQ）の4つの枠組みで客観的な視点での調査項目について、グループワークをして話し合いました。それを各々の宿題としてそれぞれの地域に持ち帰り地域調査を行いました。

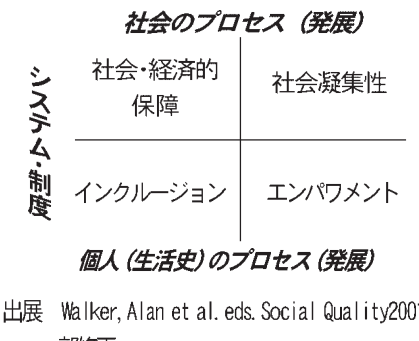
グループ単位で、調査してくる内容に違いはありましたが、今回は、全員で調査をしてきてどうだったか（困ったことや疑問に感じたことなど）を順に報告していきました。（左上図参照）

その中での、いくつかの意見を紹介します。

まず、調査対象の地域をどの範囲に設定するのかというところが最初にぶつかる壁でした。それぞれの地域で人口も校区数なども異なるためグループ内でも調査の地域指定の範囲に差があった。例えば、小学校区を単位にした場合、社会 経済的保障の項目になると校区別によって、差が大きく開いてしまう。それでは、比較しにくく、中学校区や行政区単位にまで広げて調査を行う必要があるのではないかという意見が出ました。

次に、調べたい項目についてどの機関あるいはどの人、どのような方法で調べれば良いのかということや、手順が分からないという声もありました。実際に、発表された中に、他の地域では調べられているが、自分の地域では調べることができなかった項目もあるので、今後は、その方法を共有できるようにしていく必要があります。

ソーシャルクオリティの枠組み



出展　Walker, Alan et al. eds. Social Quality2001:352
一部修正

具体的に調査方法を考える 重層的な調査へ

調査方法の一つとして、重層的調査モデルの案が出されました。

①既存の資料を用いて調査する（人口など）、**②専門家からのヒアリング**（各分野の専門家や市の職員などからSQの状況をどう評価するのか客観的に調査）、**③住民からの聞き取り調査 アンケート調査**。この3つで、②と③を比べた時、専門家の意見と地域住民の意見とで違いがないのかあるのかなど、比較することができるというものです。

調査には様々な投げかけ方があると考えられます。そこで、小野先生が以前、実際に使われたアンケートに、各自回答してみました。

「あなたの地域（地区）の社会の質は？」というタイトルで、自分の住んでいる地域を主観的に評価していくアンケートです（地域社会の質を問うアンケートで、ソーシャルクオリティの

ソーシャルクオリティの枠組みを活用した地域アセスメント（一例）

社会のプロセス（発展）

≪社会・経済的保障≫
・学校/（　クラス）、（　人）、特別支援学級（　人）
・保育所数/（　箇所）、児童数（　人）
・医療機関数/（　箇所）
→具体的に（　）
・公共交通（　）、一日（　本）
・介護保険事業所数（　箇所）
→具体的に（

≪社会凝集性≫
・婦人会（　人）
・老人会（　クラブ、　人）
・子ども会（　人）
・自治会加入率（　%）
・冠婚葬祭の助け合い
（　）

・Vo グループ数（　）
→具体的に（　）
・いきいきｻﾛﾝ数（　箇所）
・子育てサロン数（　箇所）
・地区社協の有無（有・無）
・福祉員・相談員（　人）
・民生委員（　人）
・災害時の助け合いの有無
（有・無）

≪基本情報≫
・地域名（　区）
・人　口（　人）
・世帯数（　世帯）
・65歳以上（　人，　%）
・15~64歳（　人，　%）
・15歳未満（　人，　%）
・主な産業（　）

システム・制度

生活世界
コミュニティ・集団

≪インクルージョン≫
・失業者・率（　人　%）
・生活保護世帯（　世帯、　‰）
・独居高齢者数（　人）
・障害者手帳所持者（身体　人、知的　人、精神　人）
・無保険者数（　人）
・一人親家庭（　世帯）
・虐待認知件数（　件）
・ホームレス（　人）

≪エンパワメント≫
・入居者（　人）転居者数（　人）
・区の役員の選出方法（　）
・村の決めごとに対するおかしさがあるか
→具体的に（　）
・困っている人を包み込む雰囲気があるか、何とかしてくれるか
→具体的に（　）
・民生委員・区長・福祉員等の話し合いの場があるか（回数等も）
→具体的に（　）

個人（生活史）のプロセス（発展）

項目に当てはめたものです）。

その後、アンケートに回答してみての感想を挙げていきました。インクルージョンの項目が、どの程度の物差しで見たり感じているかによって捉え方が違い、回答に困ったので、地域の人はより回答しにくいのではないか、自分自身でなく地域で考えるのが難しい、といった意見が出ました。

研修に参加している私たちでも回答に困難さを感じるのであれば、地域の人にとってはより困難であると想定されるので考慮が必要と思われます。

SQを活用し調査の結果をマップ化

次に、調査によって出た結果をどう分析していけばよいのか考えました。調査の結果をマップ化できれば、視覚的に捉えやすく、且つ地域で比較検討しやすくなるのではないか、ということです。

例えば、左上の図のように生活世界とシステムの強弱の中に、地域を当てはめていくと調査対象の地域の現状の位置が分かりやすい。これが、いくつかの地域で調査されれば、ひと目で比較しやすくなります。

ソーシャルクオリティを用いた地域分析（一例）

生活世界　【弱】

	《強》【弱】	《弱》【弱】
システム《弱》	生活世界の植民地化	限界集落自給自足
システム《強》	《強》【強】このバランスの維持は難しく、システムが大きくなりがち	《弱》【強】支え合い住民のつながりがある

生活世界　【強】

最後に…

うきは市での調査に向けて

次回は、うきは市で実際に調査する際の準備を行うことになりました。アンケート形式で行うのかインタビュー形式で行うのか。もしくは、その両方を併せた形にするのか具体的に考えていくことになりました。

そこで、次回までに、**①既存資料をもとにする場合、その資料や情報は、どの機関やどの方法で手にいれるのか、②調査結果を専門家から評価してもらうとすれば、どのような方に評価してもらいたいと考えるのか、③住民からの聞き取り調査の際は、どのような方式が良いのか**（例えば小座談会方式）、**④アンケート調査を行うのなら、どのような項目や聞き方をすれば良いのか**、以上の4つをそれぞれ、課題として持ち帰り、具体的な調査内容を考えてくることになりました。

お知らせ

inふくおか

第４回九州４県社協職員合同研究会議

私は、人と地域と こんな風に向き合っています

“知る”は楽しみなり　地域を知る
自分を知る名物ワーカーの取り組みを知る

■開催期日■
２０１０年**２月１３日（土）～１４日（日）**

■会場■
福岡市健康づくりセンター等複合施設
（〒810-0073 福岡市中央区舞鶴２丁目５番１号）

■主催■
大分県市町村社協職員連絡協議会
佐賀県市町社会福祉協議会職員連絡協議会
長崎県市町社会福祉協議会連絡協議会
福岡県地域福祉活動職員連絡会

■内容■

▼グループをつくり、関西からお招きした４人の名物ワーカーの部屋をローテーションで廻ります。

零の間	全体の意見を如何に活かして、みんなのための計画を作り実践していくのか ■兵庫県　**宍粟市社会福祉協議会　山本　正幸**　さん
壱の間	みんなの知恵と力を如何に繋いで、地域の生活課題を改善していくのか ■大阪府　**池田市社会福祉協議会　茂籠　知美**　さん
弐の間	当事者の声を如何にして顕在化し、みんなの課題として取り組んでいくのか ■兵庫県　**淡路市社会福祉協議会　凪　保憲**　さん
参の間	個々にあがる相談を如何にして聞き、如何に対応していくのか ■滋賀県　**大津市社会福祉協議会　山口　浩次**　さん

▼全体会では各部屋の報告者とフロアのやり取りを行います。

コーディネーター　**山田　早苗**さん（**元大阪府社会福祉協議会**）
コメンテーター　**小野　達也**さん（**大阪府立大学准教授**）

編集後記
―編集者のつぶやき―

青年期の障害当事者の居場所づくりを行いたいとの思いから、ボランティアグループ「寄せ鍋」を組織化して４年。

そんな「寄せ鍋」の活動に参加し始めた、ある筋ジスの男性がいます。そんな彼の言葉です。

「高校を卒業してから、何をするでもなく、家に閉じこもっていました。外出するのは病院に行く時くらいでした。家にずっといると、考え方がどんどんマイナス思考になるんですね。自分の病気のことや将来のことで悩んだり、『生きていても意味ないのでは？』『死んだ方がましなのでは？』などと考えていました。

でも、寄せ鍋に出会い、メンバーと仲良くなると、考え方がプラス思考になってきました。『今度は寄せ鍋の時に何を話そうかな』とか『今度遊びに行くの楽しみだな』とか。みんなと飲みに行くのも楽しみです。もっとメンバーと交流して仲良くなりたいです」というもの。

寄せ鍋の活動は、遊んだり、食べたり、飲んだり、騒いだりが多いです。「それがボランティアなのか」と言う人もいるかもしれませんが、「してあげる」「してもらう」という関係ではなく、「ただ一緒に過ごす」ということが大切だと考えています。

グループを組織化して終わりではなく、そのグループの活動を支援することで、グループの発展とそんな自然な人間関係の広がりをつくりたいと考えています。

そこに価値をおける社協ワーカーでありたいと思っています。

（U. Y）

★発行者
福岡県地域福祉活動職員連絡会
★事務局
〒839-1321
福岡県うきは市吉井町３４７－１
うきは市社会福祉協議会内
TEL　０９４３－７６－３９７７
FAX　０９４３－７６－４３２９
E-mail　f-chishokuren@ukiha-shakyo.or.jp